

# 骨に支えられて

酒井 朋子

「私は整形外科を専門としています」そうお話しす

ると、「ああ、目を二重にしたりするんですか」とか「脂肪って吸引できるんですか」と聞かれることがあります。多くの方が、整形外科を、テレビで宣伝している「美容整形」と、勘違いされているようです。整形外科という科は人間の体の中でも骨と関節を対象としているものです。ですから外来には骨折した子ども、関節の変形により腰痛のある老人やスポーツで膝の靭帯を痛めた青年などが来られます。

す。

整形外科でまず行われる検査といえば骨のX線写真です。我々はいつも骨のX線写真と睨めっこしています。一枚のX線写真のなかには様々な情報が詰まっております、いろいろなことを考えさせられます。

「あいつは骨のあるやつだ」「骨抜きにされた」というような「骨」を使った言葉がありますが、骨の役目とはまず人体を支えるということです。われわれの体重を毎日支えているわけですから大したもの

です。

骨は人体の組織であり、皮膚や他の臓器と同様に、生きています。骨は毎日自分を自分で壊しては作り直しています。ですから子どもは身長を伸ばすことができますし、万一骨が折れてしまってもまた治すことができまするわけです。

骨折というものは文字道理、骨が折れるわけですが、正確には生理的な連続性が絶たれた状態を呼び、いわゆる「ひび」と呼ばれているものも骨折に含まれます。

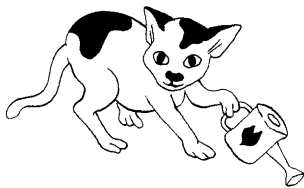
骨折はいろいろな原因で起こります。隣のお兄さんがバイクで大腿骨を骨折したり、子どもがジャングリズムから落ちて腕を折るのが一般的ですが、難産のため産道を通過する際、赤ちゃんの鎖骨にひびが入っていたり、風邪でひどい咳をして肋骨にひびが入ったり、というようなこともあります。いろいろなことで骨折が起こるわけですが、多くは自然と治ってしまいます。場所にもよりますが、四週間も

すれば骨自身が癒合して痛みがなくなります。

ここまで読まれて、骨が自分で治るなら整形外科の医者はなんと楽なことか、と思われる方もおられると思います。それはその通りですが、もちろん我々の仕事も必要ではありません。

骨折は、ずれのないものがある一方、ひどくずれを生じているものもあります。時に骨が皮膚を破り外から見えてしまっているものもあります。一般に骨折の治療というとまず、ずれた骨をもとの位置に戻し、(整復)、骨折部が動かないように維持(固定)

するということです。固定はギプス固定が有名ですが、嚴重な固定を必要としないときは簡単な副木、絆創膏固定等にとどめることもあります。ずれがひどいときや安定性の悪いものに



は、時に、手術による整復、ネジやプレートによる固定を必要とすることもあります。

整復がうまく行かないと変形を残してしまいますし、固定が悪く骨の間に動きがあると骨癒合がうまく行きません。いつも我々を支えてくれる骨も、骨折を起こした時には、よい位置に矯正し、治るまで支えてあげる必要があるのです。〃骨休め〃という言葉があります。骨は良い環境を与えてあげることの良い骨癒合が得られます。

骨癒合と言ってもその経過は骨折の状態、年齢、全身状態などにより、様々です。

骨折と診断されて、〃私は年だから骨がつくのも遅いでしょうねえ〃などと嘆かれる女性もあります。が、そんなことはありません。三十キロ程しかないような小さな九十歳のおばあちゃんの骨にも、治る能力は詰まっています。老人は布団につまづいて転んだり、などという小さな力でしばしば大腿骨骨折を起こします。その際は多くの場合、寝たきりにな

らないように手術を行います。が、経過に問題がなければ骨は必ず癒合します。しっかりと固定ができればいくつになっても骨癒合が得られます。この事実には我々も勇気づけられます。日頃の自分の能力のなさに落ち込んでも、鏡のなかに白髪を見つけ、年を感じても、まだまだ捨てたものではありません。年齢に関係なく人間には自分自身を直すという、自己修復能力があるのです。

しかし、逆に子どもの力には我々大人は、かないません。実際、子どもの骨癒合には目を見張るものがあります。子どもは大人と異なり、二週間もするとX線写真の上では、骨折部の周囲に〃化骨〃と呼ばれる幼弱な骨がみえはじめ、みるみる骨がついてしまいます。〃最近、子どもが手を動かさなくて、なにかおかしいんです〃と云ってお母さんが子どもを診察室につれてきた頃には、もうすでに骨がつき始めていることなどもよくあります。成長期の骨は代謝が速く、維持するのが目標の我々大人の骨と

は、根本的に持っている能力が違います。こんな力を知らず知らずの間にどこかに失ってきてしまったかとふと寂しさを感じるときもあります。

我々は、時にこの子どもの能力を恐ろしく感じさせられることもあります。成長する骨においては経過がよくないとき大人では有り得ない問題が生じることがあります。矯正が不十分で、成長線が乱れ、関節が変形して出来上がった、左右の長さが違ってしまったりしてはなりません。子どもの骨は正しい治療に対しては期待以上の答えを出してくれます、逆にうまく行かないときの結果は、成長が起るだけに、恐ろしいことがあります。まだ出来上がっていないもの、可塑性のあるものへの恐怖を感じるときもあります。

骨はじつに正直なもので、よい位置に矯正し、良い支えを与えると、骨は我々に必ず応えてくれます。しかし必要以上に骨を甘やかすのもよくないようです。長く固定しすぎると関節が硬くなり動きが

悪くなりますし、長く体重をかけないと骨は頑丈である必要を感じなくなり弱くなってしまいます（廃用性萎縮）。支えであるという役目を忘れ、強固であろうとする努力を止めてしまうのです。

レントゲンを眺めてはあれこれ悩むことが多い毎日ですが、骨の誠実さには頭が下がります。一生を通じて骨は常に我々を支え、自分を見つめては、ここつと自分を直し続けているのです。診察室で我々はいろいろ考え、骨を折っている。つもりですが、我々の努力とは別に、案外、骨は骨で勝手に、自分を直し、我々はその結果をみて喜んでいるだけなのかも知れないとも、思うのです。

（東京医科歯科大学）